



漱石全集  
二十七卷

書簡集一

全三十四卷 第二十七回配本

昭和三十三年六月二十七日 第一刷發行 © 漱石全集 第二十七卷

定價 一五〇圓

著者 夏目漱石

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地  
岩波雄二郎

印刷者 東京都青梅市根ヶ布三八五番地  
山田一雄



發行所 東京都千代田區  
神田一ツ橋三丁目三番地  
株式會社 岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・三水舎製本

明治三十一年

100

明治三十二年

105

明治三十三年

118

明治三十四年

133

明治三十五年

163

明治三十六年

176

明治三十七年

196

明治三十八年

221

書簡番號索引

289

解 說

295

注 解

309

目次

明治二十二年	三
明治二十三年	二
明治二十四年	三
明治二十五年	四
明治二十六年	四
明治二十七年	四
明治二十八年	五
明治二十九年	六
明治三十年	八

八 三 六 五 四 四 三 二 三

# 明治二十二年

五月十三日 月 ヲ便 牛込區喜久井町一より 本郷區眞

砂町常盤會寄宿舎正岡常規へ

今日は大勢罷出失禮仕候然ば其砌り歸途山崎元修方へ立寄り大兄御病症並びに療養方等委曲質問仕候處同氏は在宅乍ら取込有之由にて不得面會乍不本意取次を以て相尋ね申候處存外の輕症にて別段入院等にも及ぶ間鋪由に御座候得共風邪の爲めに百病を引き起すと一般にて咯血より肺勞又は結核の如き劇症に變ぜずとも申し難く只今は極めて大事の場合故出来る丈の御養生は專一と奉存候小生の考へにては山崎の如き不注意不親切なる醫師は斷然癈し幸ひ第一醫院も近傍に有之候

得ば一應同院に申込み醫師の診斷を受け入院の御用意有之度去すれば看護療養萬事行き届き十日にて全快する處は五日にて本復致す道理かと存候且つ少しにても肺患に罹ル「プロバビリチー」アル以上は二豎の膏肓に入らざる前に英斷決行有之度生あれば死あるは古來の定則に候得共喜生悲死も亦自然の情に御座候春夏四時の循環は誰れも知る事ながら夏は熱を感じ冬は寒を覺ゆるも亦人間の免かるゝ能はざる處に御座候得ば小にしては御母堂の爲め大にしては國家の爲め自愛せられん事こそ望ましく存候雨フラザルニ牖戸を綯繆ストハ古人ノ名言に候へば平生の客氣を一掃して御分別有之度此段願上候

to live is the sole end of man!

五月十三日

歸ろふと泣かずに笑へ時鳥

聞かふとて誰も待たぬに時鳥

金之助

正岡大人

梧右

何れ二三日中に御見舞申上べく又本日米山龍口の  
兩名も山崎方へ同行し呉れたり

僕の家兄も今日吐血して病床にあり斯く時鳥が多  
くてはさすが風流の某も閉口の外なし呵々

二

五月二十七日 月ル便 牛込區喜久井町一より 本郷區

眞砂町常盤會寄宿舎正岡常規へ

昨日は存外の長座定めて御蒼蠅の事と恐入り奉る其  
砌り妄評を加へ御返呈申上候七草集定めて迂生歸宅後  
御讀了の事と存じ候右に付き後に胸に手をあて善く  
く勘考仕れば前後の分別もなく無茶苦茶に六ヅカ敷  
漢字を行列したるは流石の某も例のゾー／＼しきに似  
ず少しく赤面の體に御座候何事も不作法者と御堪忍遊  
ばせと御詫の序でに願上げまするは批評の後に付した

二十八字の九絶に御座候是は餘り大人氣なく小兒の  
手習と一般にて只々紅燈綠酒の文字を書き散らしたる  
而已に候得ば斯ル者を見事の尊著にくツつけ置かん事  
七草集の耻辱且つは人目を愧づる小生の心底憐れと覺  
し給ひ一遍の御回向ならで一刀兩斷に切り棄て、屑籠  
の淨土に送らせ玉へ生レつきの不具者に候得ば扁鵲の  
妙術も一人前には治し難きは無論の儀と存じ候得ば生  
きて人目に曝しますより殺した方が親の慈悲かと存候  
去り乍ら凡夫の淺ましき萬一貴君の配劑にて生來の癩  
疾も頓治の見込なきやと夫ばかり心配仕居候燒野(の)  
きゞす夜の鶴不具な子程〔可〕愛ゆきは矢張り親の慾目  
に御座候必ず必ず凡夫と御さげしみなき様願上候 匆  
々

二十七日

菊井の里

漱石より

丈\* 鬼 様

七草集には流石の某も實名を曝すは恐レビデゲス

と少しく通がりて當座の間に合せに漱石となんしたり顔に認め侍り後にて考ふれば漱石とは書かで漱石と書きし様に覺へ候此段御含みの上御正し被下度先は其爲め口上左様

米山大愚先生傍より自己の名さへ書けぬに人の原文を評するとは「テモ恐シイ頓馬ダナー」チヨン々々々々々

三

八月三日 土 牛込區喜久井町一より 松山市湊町四丁目

一六番戸正岡常規へ「正岡子規『筆まかせ』より」

炎暑之候御病體如何被爲渡候哉日夕案じ暮し居候とは些と古めかしくかたくるしき文句ながら近頃の熱さでは無病息災のやからですら胃弱か腦病、脚氣、腹下シ杯種々な二豎先生の來臨を辱ふする折柄なれば貴殿の如き殘柳衰蒲も宜しくといふ優にやさしき殿御は必ず療養專一攝生大事と勉強して女の子の泣かぬ様餘計

な御世話ながら願上候儲惡口は休題として愈本文に取り掛りますれば小生義愚兄と共に去月廿三日出發東海道興津へ轉地療養の爲メ御越し被遊昨二日夜歸京仕候興津の景色の美なるは大兄も御承知ならんが先ツ大體を申せば

都城\*之西、六十餘里、山勢隆然、拔地而起、潮流直逼山麓、山海之間得平地、纔五十步、旗亭十數、點綴其間、與蟹戸漁家錯落相間、呼曰興津、所謂東海五十三驛之一也、山腹有古刹、佛閣經樓、高出于青靄之上、望之縹渺如畫圖、興津之西、山勢漸向北而走、海灣亦南曲、三里而達清水港、港盡而灣再東折、突出洋中二里許、古松無數、遠與天連、白帆明滅、行其間、是則興津驛之勝概也、呼其寺、曰清見寺、呼其山、曰清見山、呼其灣、曰清見瀉、而西南長岬、橫斷大海者、爲三保松原、遠山如黛、白雲蓬勃者、爲伊豆大嶋、天晴氣朗之時、仰看芙蓉于東北、大凡騷人墨客、上旗亭坐樓頭者、杯酒談笑之際、一矚而得悉收此數者於眸中焉、



蓋所謂東海道、自東都至西京、長二百餘里、有驛五十有三、山則函嶺、水則天龍矢矧、都邑則靜岡名古屋、其間長亭短驛、名山大川、固不爲鮮矣、然至山海之勝、魚蝦之美、則余獨推興津爲最、是以數年以來、縉紳公卿、避暑遊于此地、陸續屬至、山蒼水明之鄉、亦將漸化絃歌熱鬧之地、可嘆也、……

餘り長イト御退屈先ヅ、御里が露ハレヌ中ニ切り上ゲベク候右の如く風光は非常に異な處ナレモ風俗ノ卑陋ニテ物價の高値ナルニハ實ニ恐レ入りタリ小生等最初は水口屋と申す方に投宿せしに一週間二圓にて誠にいや、雲助同様の御待遇を蒙むれり樓上には曾我祐準先生將軍乎として鎮座まします者から拙如き貧乏書生は「パラサイト」同様の有様御憫笑可被下候拙會我中將を呼んで御山の大将ト云へり(解に曰く高之謂山、樓者高故曰御山、大将者武人ニ)手短かに申せば樓上ノ軍師(梁上ノ君子ニアラス)ト云フ意味ニ宿屋ノ主人御山の大将ヲ拜スルコト蜘蛛ノ如ク婢僕ノ之ヲ敬

スルコト鬼神ノ如シ儲々金錢程世ノ中に尊きはあらじと樓下ニテ握リ壘丸をしながら名論を發明仕り候夫より忼慨心を鼓舞し身延屋といふに一週間三圓の御散財にて御轉居仰せ被出二三日逗留すると又々何處かの縉紳先生の爲に迫出され、どうにもこうにも駿河の國立ツたり寐たり又興津、清見の浦は清むとても心はすまぬ濱千鳥啼くより外はなかりしが(ヤ、デン)といふ體裁、汗臭き富士講連と同車にて漸々歸京仕候何れ道中の御話は御面晤之節萬々可申述候云々

1 先は炎熱の候時候御厭ひ可被成何れ九月には海水にて眞黒に相成りたる顔色を御覽に入べく夫迄はアヂユ

丈鬼兄座右

菊井町のなまけ者

四

九月十五日 日 牛込區喜久井町一より 松山市湊町四丁

目一六番戸正岡常規へ〔正岡子規『筆まかせ』より〕

露冷殘螢瘠風寒柳影疎なるの時節とはあまり長過ぎ  
てゴロがわるくは候得共僕が創造の冒頭ナレバだまつ  
て御讀被下度候儲右の様なる時節到來仕候處貴兄漸々  
御快方の由何よりの事と存候小生も房州より上下二總  
を經歷し去月卅日始めて歸京仕候其後早速一書を呈ス  
ル積りに御座候處既に御出京に間もあるまじと存日々  
延頸して御待中上候處御手紙の趣にては今一ヶ月も御  
滞在の由隨分御のんきのとと存候云々

五

九月二十日 金 牛込區喜久井町一より 松山市湊町四丁

目一六番戸正岡常規へ〔正岡子規『筆まかせ』より〕

(略)五絶一首小生の近況に御座候御憫笑可被下候

抱劍聽龍鳴、讀書罵儒生、

如今空高逸、入夢美人聲、

第一句は成童の折の事二句は十六七の時轉結は即今

の有様に御座候字句は不相變勝手次第御正し被下度候  
云々

六

九月二十七日 金 ヲ便 牛込區喜久井町一より 松山市

湊町四丁目一六番戸正岡常規へ

貴意の如く懐冷財布瘠の候大まい二錢の御散財をも  
顧み給はず四國下りまで御震翰下し賜はる段御親切無  
かし感涙にむせびて郎君の大悲大慈をあり難がり奉る  
ならんといやに恩に着せて御注進仕るは餘の儀にあら  
ず先頃手紙を以て依頼されたる點數一條おつと承知皆  
迄云ひ給ふな萬事拙の方寸にありやす先づ江戸つ子の  
爲す所を御覽じろとひま人のありがたき急に用事の持  
ち上りたるを嬉しがり早速祕術をつくして久米の仙人  
を生捕り先づ安心はした者の鐵砲ずれで(面ずれより  
脱化し來るに似たり)手の皮の厚さ一尺もあると云ふ  
ひなた臭い兵隊を相手の談判は都び男やさ男を以て高

名なるやつがれには到底出来やせん引き下りやすと反り身になつて斷はると云ふ所だがそこがそれ君いや妾の爲めでげす掛がへさへあれば命の二つや三は進呈仕りてよろしくと云ふ位な親切者だからちつともひるまらず古今未曾有の勇氣を鼓舞して二三回戦争の後是も武運目出度乃公の勝利と相成令娘の身體は一部一年三(三)組の室中を横行しても豎行しても御勝手次第なり

定めて

あらまあほんとうに頼もしい事、ひよつとこの金さんは顔に似合ない實のある人だよ」と云はれるだろふと乃公の高名手柄を特筆大書して吹聴する事あら〜如此

九月二十七日夜

郎君より

妾へ

此手紙到着の頃は定めて東上の途中ならむ若しも亦愚圖々々して故郷にこびりついて居るなら此書拜見次第馳出して東京へ罷り出べき事

七

十二月三十一日 火 牛込區喜久井町一より 松山市湊町

四丁目一六番戸正岡常規へ〔正岡子規『筆まかせ』より〕

歸省後は如何病軀は如何讀書は如何執筆は如何、如何にして此長き月日を短く暮しめさるゝやけふは大三十日なりとて家内中大さわきなるに引きかへ貧生のありがたさは何の用事もなく只晝は書に向ひ膳に向ひ夜は床の中にもぐりこむのみ氣取りて申さば閑中の閑、靜中の靜を領するゝ俗に申せば錢のなきため不得已握り拳丸をしてデレリと陋巷にたれこめて御座るゝ此休みには「カーライル」の論文一冊を讀みたり二三日前より「アルノルド」の「リテレチュア、エンド、ドクマ」と申者を讀みかけたり御前兼て御趣向の小説は已に筆を下し給ひしや今度は如何なる文體を用ひ給ふ御意見なりや委細は拜見の上逐一批評を試むる積りに候へと兎角大兄の文はなよ〜として婦人流の習氣を脱せ

ず近頃は篁村<sup>\*</sup>流に變化せられ舊來の面目を一變せられたる様なりといへとも未だ眞率の元氣に乏しく従ふて人をして案を拍て快と呼びしむる箇處少きやと存候總て文章の妙は胸中の思想を飾り氣なく平たく造作なく直敘スルガ妙味と被存候さればこそ瓶水を倒して頭上よりあびる如き感情も起るなく胸中に一點の思想なく只文字のみを弄する輩は勿論いふに足らず思想あるも徒らに章句の末に拘泥して天真爛漫の見るべきなければ人を感動せしむると覺束なからんかと存候今世の小説家を以て自稱する輩は少しも「オリヂナル」の思想なく只文字の末のみ研鑽批評して自ら大家なりと自負する者にて北海道の土人に都人の衣裳をきせたる心地のせられ候成程頭の飾り衣の模様仕立の具合寸分の隙間なきかは知らねど其人の價値はと問はゞ三文にも當せず其思想はと問はゞ一顧の價なきのみならず鼻をつまんで却走せざるを得ざる者のみの様に被思候獨り篁村翁のみは直ちに胸臆<sup>原</sup>を直敘して天真爛漫の風姿紙

上に躍然たる處なきにあらねど是亦質朴なる老翁のいやみ氣なきに過ぎず田舎漢の通がりにまさる萬々なりといへ共さりととも端肅とか適麗とか磊落とか人をして一見嘆賞感動せしむる風采には乏きやに被存候故に小生の考にては文壇に立て赤幟を萬世に飜さんと欲せば首として思想を涵養せざるべからず思想中に熟し腹に滿ちたる上は直に筆を揮つて其思ふ所を敘し沛然驟雨の如く勃然大河の海に瀉ぐの勢なかるべからず文字の美章句の法杯は次の次の其次に考ふべき事にて Idea *itself* の價値を増減スル程の事は無之様に被存候御前も多分此點に御氣がつかれ居るなるべけれど去りとて御前の如く朝から晩まで書き續けにては此 Idea を養ふ餘地なからんかと掛念仕るゝ勿論書くのが樂なら無理によせと申譯にはあらねど毎日毎晩書てゝ書き續けたりとて子供の手習と同じとにて此 original idea が草紙の内から靈現する譯にもあるまじ此 Idea を得るの樂は手習にまさると萬々なると小生の保證仕る處

なり(餘りあてにならねど)伏して願はくは(雜談にあらず)御前少しく手習をやめて餘暇を以て讀書に力を費し給へよ御前は病人之病人に責むるに病人の好まぬとを以てするは苛酷の様なりといへども手習をして生きて居ても別段馨しきとはなし knowledge を得て死ぬ方がましならずや塵の世にはかなき命ながらへて今日と過ぎ昨日と暮すも人世に happiness あるが爲入されど十倍の happiness をすつゝ十分の一の happiness を貪り夫にて事足り給ふと思ひ給ふや併し此 Idea を得るより手習するが面白しと御意遊ばさば夫迄なり一言の御答もなし只一片の赤心を吐露して歳暮年始の禮に代る事しかり穴賢

御前此書を讀み冷笑しながら「馬鹿な奴だ」と云はんかね兎角御前の coldness には恐入りやす

十二月卅一日

漱石

子規御前

## 明治二十三年

### 八

一月 牛込區喜久井町一より 松山市湊町四丁目一六番戶

正岡常規へ〔正岡子規『筆まかせ』より〕

いそがしき手習のひまに長々しき御返事態々御つかはし被下候段御芳志の程ありい（洋語にあらず）かく迄御懇篤なる君様を何しに冷淡の冷笑のとそしり申すべきやまじめの御辯護にていたみ入りて穴へも入りたき心地ぞし侍る程に一時のたわ言と水に流し給へ七面倒な文章論かゝずともよきに、そこがそれ人間の淺ましき終に餘計などをならべて君に又攻撃せられて大閉口何事も餅が言はする雑言過言と御許しやれ

當年の正月は不相變雜煮を食ひ寐てくらし候寄席へ

は五六回程参りかるたは二返取り候一日神田の小川亭と申にて鶴蝶と申女義太夫を聞き女子にてもかゝる掘り出し物あるやと愚兄と共に大感心そこで愚兄余に云ふ様「藝がよいと顔迄よく見える」と其當否は君の御批判を願ひます

米山は當時夢中に禪に凝り當休暇中も鎌倉へ修行に罷越したり山川は不相變學校へは出でこず過日十時頃一寸訪問せしに未だ褥中にありて煙草を吸ひ夫より起きて月琴を一曲彈て聞かせたりいつもくくのん氣なるが心は憂鬱病にかゝらんとする最中へ是も貴兄の判斷を仰ぐ兎角此頃は學校でも吾黨の子が少ないから何となく物淋しく面白くなし可成早く御歸りくもう仙人もあきがきた時分だろうから一寸已めにして此夏に又仙人になり給へ云々

別紙文章論今一度貴覽を煩はす云々

埋塵道人拜

四國仙人悟下

七草集四日大盡水戸紀行其他の雜錄を貴兄の文章  
と入文章でなしと仰せらるれば失敬御免可被下候

〔別紙〕

僕一己ノ文章ノ定義ハ下ノ如シ

文章 is an idea which is expressed by means of  
words on paper 故ニ小生ノ考ニテハ idea ガ文章ノ  
Essence ニテ words ヲ arrange スル方ハ element ニ  
ハ相違ナケレド essence ナル idea 程大切ナラズ經濟  
學ニテ申セバ wealth ヲ作ルニハ raw material ト la-  
bor ガ入用ナルト同然ニテ此 labor ハ單ニ raw mate-  
rial ヲ modify スルニ過ギズ raw material ガ最初ニ  
ナクテハ如何ナル巧ノ labor モ手ヲ下スニ由ナキト同  
然ニテ idea ガ最初ニナケレバ words' arrangement  
ハ何ノ役ニモ立タヌナリ

是ヨリ Best 文章ヲ解セン

Best 文章 is the best idea which is expressed in  
the best way by means of words on paper.

此 underline ノ處ノ意味ハ idea ヲ其儘ニ紙上ニ現  
ハシテ讀者ニ己レノ idea ノ Exact ナル處 (no more  
no less) ヲ感ゼシムルト云フ義ニテ是丈ガ即チ Rhet-  
oric ノ treat スル所と去レバ文章(余ノ所謂)ハ決シテ  
Rhetoric ノミヲ指スニ非ス此儀上ノ解ニテ御合點ア  
リタシ

ソレデ此 idea ヲ涵養スルニハ culture ガ肝要ニテ  
次ハ己レノ經驗ナリ去レレ己レノ經驗ノ區域ノミニテ  
ハ Idea ヲ得ル區域狭キ故 culture ノ方が要用ナリト  
申スナリ

然ラバ Culture トハ如何ナル者ト云フニ knowing  
the ideas which have been said and known in the  
world ト小生ハ定義ヲ下ス積リナリ然ラバ culture ヲ  
得ル方ハト云フニ讀書ヲ捨テ、他ノ方ナキハ貴君モ御  
左祖ナルベシ故ニ讀書ヲシ玉ヘト勸ムルナリ去リ乍ラ  
Rhetoric ヲ廢セヨト云フニ非ス Essence ヲ先ニシテ  
form ヲ後ニスベク Idea ヲ先ニシテ Rhetoric ヲ後ニ

セヨト云フナリ(時ノ先後ニアラズ輕重スル所アルベシト云フノ意ナリ)

是ヨリハ嚴肅トカ端麗トカ云フ文章ヲ analytically  
ニ御示シ申スベシ

(1) 嚴肅ナル文章=嚴肅ナルidea expressed by  
means of words.

(2) 適麗ナル文章=適麗ナルidea expressed by  
means of words, etc.

故ニidea ニシテ嚴肅トカ適麗トカ云フ形容詞ヲ附  
ケ得ベキ Idea ナラ紀行文デモ議論文デモ小説デモ何  
デモ嚴肅ナル又適麗ナル文章ト云ヒ得ルト

(然シidea ニモスル形容詞ヲ附シガタキ者アリ此  
idea ヲ express スル文章ニハ到底カ、ル形容詞ヲ  
附シ難シ此ハ scientific treatises ニテ見出ス物ニテ  
pure literary work ニハ何如ナル種類ヲ問ハズ斯  
ル形容詞ヲ付スルヲ得ベシト存ズ)  
是ニモリ mathematically 11 Idea 1 Rhetoric 1 com-

bination ヨリ何如ナル文章ガ出來ルカヲ御目ニカケ  
ン

1 case Idea = best  
Rhetoric = 0 } make up no 文章

臨杯ハ best idea ガアルヲ Rhetoric ナキタメ  
any speech ガデキヌ如シ但シコレハ文章ノ例  
ニアラズ

2 case Idea = 0  
Rhetoric = best } no 文章 imaginary case

3 case Idea = best  
Rhetoric = best } best 文章

4 case Idea = bad  
R = bad } bad 文章

5 case Idea = best  
R = bad } ordinary 文章

6 case Idea = bad  
R = best } bad 文章



此 last two cases ヲ比較セバ Idea ノ R ㉟リ  
 要用ナルヲ知ルベシ

此 cases ノ中 1 & 2 ハ殆ンド extreme ノ case デ  
 實際ナシト云フモ可ナリ但シ尤 important トナルハ  
 5 & 6 ナリ元來 Best Rhetoric トハ△ナラ△ノ idea  
 ヲ Express シテ人ガ讀ンデモ同形同積ノ△ニ感ズル  
 フゾフニアラスヤ換言スレバ original idea ヲ origi-  
 nal ノ儘ニ convey スルガ best Rhetoric ナリ故ニ假  
 令 R ガ best ナリトモ idea ガ bad ナレバ bad ナ  
 idea ヲ bad ナリニ convey スルニ過ギザレバ文章ハ  
 bad ニシカナラス之ニ反シテ R ハ bad ニテモ Idea  
 ガ best ナレバ best ナ Idea ガ此 bad Rhetoric ノ爲  
 メ幾分カ modify セラレテ best ナリニ express セラ  
 ルノ能ハズ單ニ ordinary ノ者トナルニ過ギザルナリ  
 小生ノ平タク無造作ニ飾氣ナク Idea ヲ express ス  
 ルガ妙文ナリトハ(3)ノ case ヲ云フノミ即チ best ナ  
 Idea ヲ平タク無造作ニ best ナリニ讀者ニ感ゼシムル

△(which is only possible by means of the best  
 Rhetoric.) 章句ノ末ニ拘泥スルトハ第二ノ如キ case  
 △ R ハ best ナレモ Idea ガ 0 ニ近ケレバ幾ハズ no  
 文章ナリト云フ△

- 君ノ三條  
 ハ贊ニ  
 dimsy  
 極ナルヨ
- (1) 讀ム本ヲ知ラザバ人ニ聞クガイノデ  
 ハナナカ
  - (2) 讀ム本ガナクハ買フテモ借リテモイ  
 ハデハナナカ
  - (3) 英文ガ讀メナケレバ勉強シテモヨシ  
 バムヲ得ズバ日本書漢籍ヲ讀ムデモ  
 イハデハナナカ

君ノ云フ二條ノ文學者ノ目的ハ僕ハ大ニ不贊成ダケ  
 レモ暫ラク君ノ云フ通り右ノ二條ガ目的ナルニモセヨ  
 君ノ所謂文章(Rhetoric only)デ此目的ガ達セラル  
 ト思ヒ給フヤ又ハ(Rhetoric only)ガ此目的ヲ達スル  
 ニ最必要ナリト思ヒ玉フヤ今一度御勘考アラマホシウ